

「被爆者からの訴え」

被爆の実相を平和宣言を通じて世界に訴える

①建物疎開に従事中被爆し、負傷した若い女学生達の「水を下さい！」の悲痛な声、声が未だに耳にあり、当時の火傷に水は禁物の常識から、憲兵の「水は禁物捨てる！」は良識ある判断だが、後日”水を飲んだ被爆者”が助かった例を聞くにつれ、阻止されて与えられなかったが故、水欲しさの余り川に水を求めて溺死したであろう若い女学生達の余りにも酷い姿が、未だに眼前に彷彿として”可哀相に”とこのような残酷な原爆を使用した米国の暴虐な仕打ちに憤りを抑えられない。

②私の父の想像を絶する大火傷の実相、顔と頭の火傷は今まで見たことがない状態で、顔は酷く膨脹（二倍にと思われる程）し、目や口は閉ざされた状態で、家族挙げての看病で何とか一命は止めたものの、全体に酷たらしいケロイドが残り、二度にわたる日赤病院での手術にも関わらず、耳の片方は半は溶けてなくなり、顔反面に醜いケロイドを残し、県庁職員の同僚が見違える程の変貌ぶりであった。又、両手、両足の露出部分は皮膚は剥けて無くなり、赤み全体を赤身が露出し、猛烈に痛がり傷口に蠅がたかり、治療時の他は常時髪袋で防御していた為に後日、両手の機能を失い、三度目の手術を試みたが、顔の二度にわたる手術時と術後数日間の激痛に本人ともともとより家族が耐えきれず猛反対した為、亡くなるまで両手はペンがやっと持てる程度で終生不自由に耐えた。

③被爆日の翌日、6月7日私と一緒に負傷した父を、奥海田村の疎開先から大八車で迎えるべく、私と連れ立って入市した姉は、その後も何度となく焼け残った舟入川口町の自宅の寝具や台所用品の搬出に従事したのが為、後日子宮癌や乳癌等体の複数の部位に癌が発症し、長年の闘病生活の末、苦しみながら73歳で他界した。こうした例は被爆者の中に多数見受けられる。被爆後幸い生き永らえた者も苦しみと不安の生活を余儀なくされた。

④被爆後姉同様入市した兄も、その後胃癌、直腸癌、喉頭癌、食道癌等に侵されて、大手術を受けること数回、最近は二度の喉頭癌手術を受け、未だに大学病院に通院を余儀なくされ、その上心筋梗塞にも冒されており、目下自宅療養中である。

以上、直接救助せんとした女学生達から、友人、知人の多く、そして私の親、兄弟更に叔母、従兄弟達の多くの犠牲者をだし、痛恨極まりな事です。

以上に鑑みて、次の如く提言致します。

1. 「原爆の日」を国の記念日に制定する。

「ヒロシマ」が年々風化しているのは衆目の一致する処、多数の尊い犠牲者の死を無駄にしてはならない。世界唯一の被爆国として、いまこそ「戦争絶滅と世界平和の実現」を国の内外に強くアピールするための国を挙げての行事を展開する。当日の学校は「戦争と平和」について学習する。全国民は一日を犠牲者の冥福と祈りの日とする。勿論、広島のみならず今戦争の最大の劇戦地「神縄」も又「長崎」も同じ被爆地として、広島同様記念日とする。

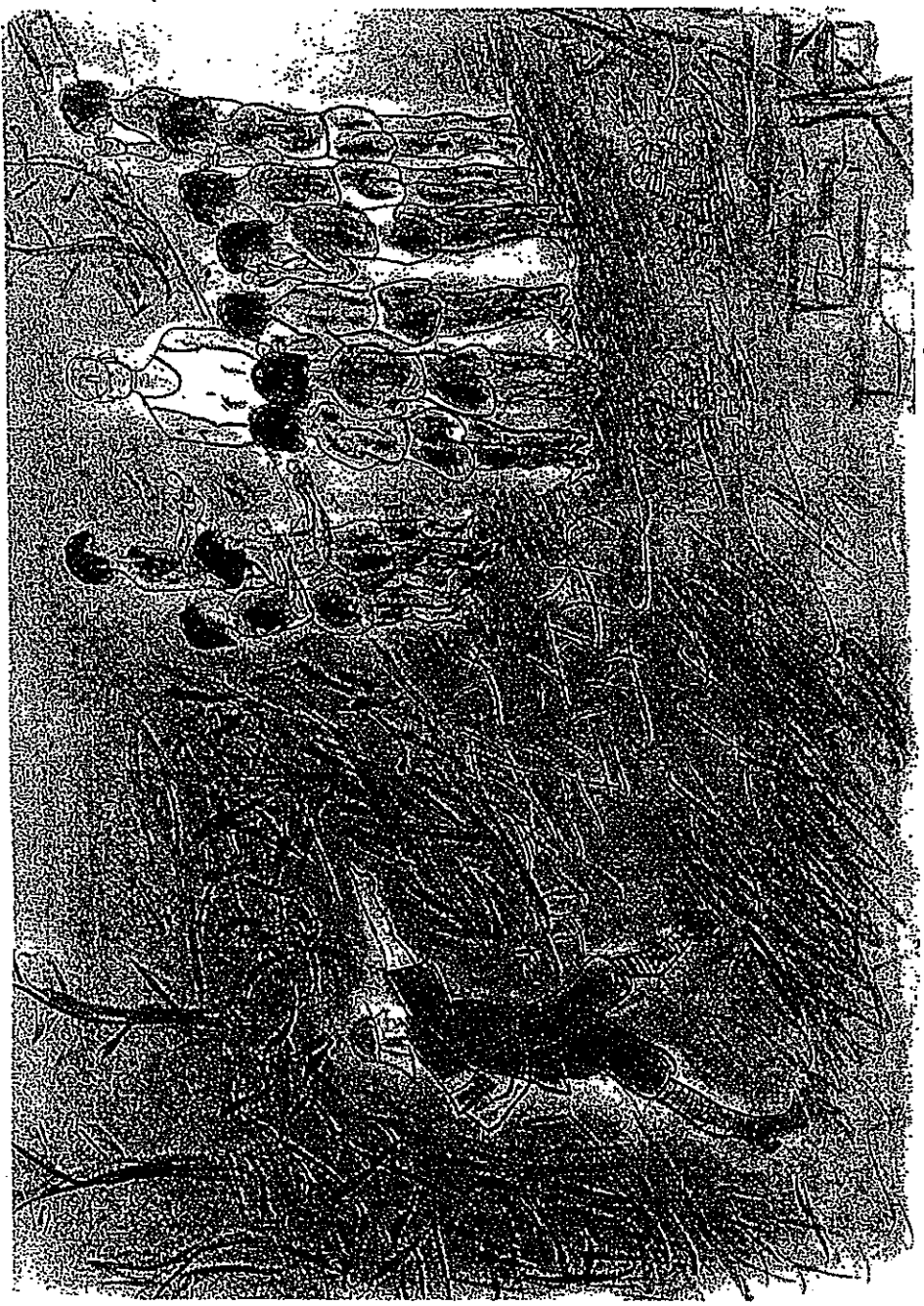
2. 原爆計画、実施した当事国の大統領たる者、遅まきながら慰霊祭に参列し、慰霊碑に額ずき犠牲者の冥福と謝罪をすべきである。かってプラハで原爆絶滅の宣言をしたと聞くが、日本において世界に向かって宣言してこそ意味があると思う。「参列してくれれば、謝罪して貰わなくてよい」と勝手な言辭を弄した人がいたが参列するだけでは無意味であり、謝罪してこそ犠牲者とその遺族の遺恨の情に安らぎがもたらされれると思う。かつてドイツの首脳が、アウスビッシュの地で地上に跪き、額を地に全身全霊をもって謝罪したとの前例がある。これと同一視するのではなく、アメリカが犯した罪は正に「20世紀最悪の恥辱」であり、このままではアメリカ人も世界史の審判の前で、永久に良心の呵責に苛ら続けらるることとなる筈。アメリカ大統領の勇氣ある決断を促したい。それでこそ彼の政治哲理「変化」の実践の証明となろう。

3. 旧市民球場跡地に、「戦争と平和記念館」の創設を。
國の内外から、平和公園を訪れる人達が、「世界遺産」に指定され一層増加うたよるに思う。しかし、慰霊碑に敬虔な祈りを捧げる人の姿が少くないのは寂しい。広島は単なる観光都市ではない。世界初の被爆都市として「平和都市」としての使命がある。今こそ広島市を初め市民全体が使命感と期待感を再認識は言動に徹して欲しい。例えば市民が率先して慰霊碑に額ずく姿を示範し、カメラの被写体だけで済まうとする外国人、心なき青少年達を啓蒙する働きを示して欲しい。さらに、日本史や世界史を動かした戦争と、その後にかち得た平和の裏相を、ビジュアル化して子供や、高齢者にも理解し易く解説し、興味、関心せしめ、来観者を呼んで国内外に広く伝播し、単に観光のみに終わらせず有意意味な効果を期待したい。

遺言（1）

被爆後70周年の重要な節目を迎え、世界各地で未だに戦火が絶えない処か、大國間で一触即発の緊張状態が続き、世界人類ひとしく恐怖に脅えています。今こそ、世界史上原爆被爆国日本として、「世界平和」実現への先導者となって、地球の危機と戦争放棄を強く訴え、世界中の為政者をして「世界平和実現」のための責任ある行動を促さねばならない秋と思います。特に被爆都市ヒロシマとして、「原爆」が想像を絶する残酷、無残な兵器であり、被爆した犠牲者の肉体に与えた苦痛（皮膚を溶かし、直接肉体を焼き焦がす苦悶の極を与え、それを一時忘れ去るか如き”喉の渴き”に絶句しつつも「水を！水！」と渴望しつつ川に飛び込み息絶えた多くの犠牲者達の苦悶の声、姿を、又この原爆の忌まわしい後遺症に苦しみながら、今もって病床に伏している多くの被爆患者達の痛み、不安、嘆きに思いを馳せながら、年々減少の一途を辿る生き残りの被爆者の声なき声に耳を傾け、核絶滅と世界平和の尊さを強く訴求して戴きたい。ヒロシマ市長としての義務、責任、使命感を胸に声を大にして、この原爆の比類は残忍な武器を發明し製造に関わった学者、為政者達を初め敢えて使用に踏み切った軍関係者達、さらに現存する当事国米国の為政者達に、敢えて使用し広島、長崎の多くの犠牲者を灼熱の煉獄に落と入れた歴史的事実と、後遺症に苦しむ現実に、猛省を促し率先して「永遠の世界平和」の実現に向け、核廃絶と如何なる手段を用いても”地球上から”戦争の絶滅”を世界人類共通の誓いにして欲しい。数年前オバマ大統領は、プラハで高らかに「平和宣言」を提唱したと聞かすが、世界史上唯一の被爆国ヒロシマで、かつて、慰霊碑に額ずき、犠牲者の鎮魂と世界平和を祈念したローマ法王の如く、先ずもって慰霊碑に額ずき「70年前の自國が冒した”二十世紀最大の恥辱”を詫び、犠牲者の鎮魂の誠を捧げ」た上、未だに世界唯一の超大國の大統領として声高らかに「平和宣言」を世界中に発信すべきではなからうか。

毎年慰霊祭に参列する内外の人々こそって”70年前の広島のみ、痛み、渴き”に改めて思いを馳せ、加害者、被害者の別なく戦争に関わった国々の諸人と共に、誤った戦争を反省し、二度と戦争を繰り返すことなく、今こそ”世界平和”の実現に向かって、”過ちは二度と繰り返しません”の碑文に誓いを新たにしたい。





被爆体験談

私は戦争が始まった年に、小学校に入学しました。

だんだん戦局が激しくなり、二年生の頃には、元日に素足で神社にお参りしました。足がこごえて痛くなり感覚がなく、泣き乍ら帰ったものです。兵隊さんの事を思えば、靴下を、はかずに頑張ると云う事だっただけだと思います。

それからが大変でした。何の物資もなく、一クラス50人に運動靴一足を、くじ引きで当たった人が買えると云う状態で、すべてがそぐでした。特にひどかったのは、教科書で、新聞紙みたく折ってあるのを広げれば、一枚の大きな紙になりました。私達はお国の為と「ほしがりません勝つ迄は」と云う標語のもと、何事も我慢して来ました。

被爆した時は、小学6年生の時で、戦時中だったからでしょうか、夏休みの時期なのに登校中でした。

私は宮島線の高須に住んでいて、草津小学校に通っていました。電車の線路づたいに歩いていたら急にパツとあたりが明るくなり、地震の様に周囲がぐらぐらした様な気がしました。顔が熱くて思わず両手で顔をおおっていました。二、三人で登校していたのですが、余り熱いので近くの民家にとび込みましたが、すぐ家が倒れそうになったので外に出ました。外の様子はガラリと変わり、阿鼻叫喚そのもの。びっくりして、すぐ家路へと向いました。その時黒い雨が降って来て、真黒になって帰りました。空を見上げると莫赤な火と黒い煙、あたりは薄暗く、私達は我が家もえていると思ひ泣きました。眼の前を見ると、中心部から裸同然の人達がやけどで皮フもはがれ、男か女かも分らない人達がぞくぞくとやって来てはありませんか!!言葉もなくやっとなにたどどり着き、防空ごうから出て来た母の顔を見た時はどんなに嬉しかったことか。床高（トコタカ）に建っていた我が家の縁の下には精も根もつき果てたやけどの人達が大勢入り込んで、うめき声を上げていました。傷口からはすぐうじ虫がわき、水、水と云い乍ら死んで行きました。夕方には全員引き出して、前の畠で山の様に積んで焼きました。

今の若い人には考えられない事ばかりでしょう。

食料も着るものもなく、何の援助もなく見事立ち上った広島の人達に、私は心より拍手を送ります。

体験記

昭和二十年八月六日、当時旧制中学校一年生で、小津航空兵に進出したい
心、朝学委員の選を望む。消防隊攻撃の予備の建設物疎開に
比定山公園の敷地を必要とし、リザーブの先鋒にシフト、然して
心は多少騒動もあつた。即ち飛ぶこと、建設物の疎開、予備の建設物に
自分もたつた建設物に入ら、一瞬間、急いで逃げ、誰かの足に
踏まはれ、踏むか？ 逃げたか？ 防火用水の上には、踏むと、程々の
空間を自覚して脱出、女子の電車道は黄色い帯と和りに、三つ又変
と思つた。逃げたか？ 逃げたか？ 逃げたか？ 逃げたか？ 逃げたか？
練兵場の偶然に、修平の逃がしたお姉さん、私の工場に行つた
朝日洋、練兵場の端に、山崎の修平に、福之、北之、三つ又、三つ又
修平の可憐な顔を、修平の可憐な顔を、お姉さん、お姉さん、お姉さん
今夜は、鉄道の端、西原、己斐、お姉さん、お姉さん、お姉さん
南観音所、お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん
お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん
お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん
お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん、お姉さん

「被爆体験談や平和への思い」応募用紙

記入日 平成 26 年 (2014 年) 月 日

| | | | |
|------------------|------------|---------|------------|
| ふりがな 氏名 | 福田 達雄 | 生年月日・年齢 | [Redacted] |
| ※ 氏名の公開の可否 (可・否) | (可) | 現住所・連絡先 | [Redacted] |
| 電話 | [Redacted] | FAX | [Redacted] |

(聞き取り代筆した方の連絡先)

| | |
|------------------|-----------|
| ふりがな 氏名 | 電話 () - |
| ※ 氏名の公開の可否 (可・否) | FAX () - |

※ 上記に記載された個人情報取り扱いについては、広島市個人情報保護条例に基づき、平和宣言の作成、被爆の実相を伝える資料としての活用及びこれに付随する事務連絡のみに使用し、御本人の同意なく第三者に提供しません。

(被爆当時の状況)

| | | | |
|---|------|----|-----|
| 当時の年齢 | 19 歳 | 性別 | 男・女 |
| 当時の職業・学年等 (できれば具体的な勤務先・学校名等も御記入下さい) 広島市/陸軍病院、衛生兵、被爆落下直後から看者の手当 死体の焼灰を毎日行い、運中体調も悪く、連日休んで休みの日でも 良くならず、被爆者の手当、死体の焼灰をすすみ、毎日で1ヶ月の末に 復員しました | | | |

- ※ 被爆当時の状況については、平和宣言に盛り込む際や被爆の実相を伝える資料として活用する際に、公開します。
- ※ この応募用紙に、被爆体験談 (様式不問) を添付してください。
- ※ 提出された書類は返却いたしません。

被曝体験談や平和への思い(2)証言

福田 典子

送信日時: 2014年

宛先: #市民局平和推進課

8月6日の朝友人の家に学校と一緒に行くかと思っただけで出かけた。空襲警報が鳴ったので一度は家の中に入ったがすぐに警戒警報が解除になったので外に出た。するとピカッと見た事が無いような光線が光った。それからドーンと大きな音がして、そこらじゅうの物が吹き飛んだ。爆風であらゆるものが吹き飛んだ。私は気が付いたら溝に落ちていた。前が見えないくらい土壁の埃や煙で自分が何処にいるのか茫然としていた。近くに大きな金たらいがあったので、防空頭巾代わりに被って家に帰った。八百屋の家はガラスが飛び散っていた。向かいのお寺、当時尾長説教所の屋根が吹き飛び惨たんたる光景だった。家の中にいと次々と爆心地近くの被爆者が家の前を逃がっている姿が見えた。服はやけ裸同然の姿で、しかも肉皮が垂れ下がりがお化けのように腕を前にあげて逃げてきた。14歳の私は逃げてくるひどい状態の被爆者を見て怖さに震えるばかりだった。そのうちおじさんが帰ってきたが、体中の肉や皮が火傷で垂れ下がっていた。叔父さんは比治山橋地点で被爆したので相当ひどい傷を受けていた。葉がないのできゅうりを貼ってやけどの治療をしてあげていた。するときゅうりを貼っている私に叔父さんが「B29じゃ！逃げろ！わしが見つけてやるから、お前たちは逃げろ！」とずっとうわごとを言っていた。しばらくすると叔父さんの体には蛆虫が湧いてきたので、割り箸で火傷の痕に入り込んだウジ虫をつまんで取っていた。叔父さんは髪も服も全て焼け焦げており、うわごとばかり言って死んでしまった。その間も私達生き残った者は雲備倉庫に行っただけで、食べ物は構わないと近所中の人達が食糧を求めて雲備倉庫に食べ物を探しに行き、実際僅かな食べ物を食べた。しかし今思えば内部被ばくの原因だったと思う。黒い雨の記憶が消えるほど叔父の姿や逃げたきたひどい傷の被爆者の姿は恐怖だった。学徒動員で砂鉄を素手で扱って手榴弾を作っていた私の同級生はほとんど死亡していた。学校で先生が被曝で死んだ生徒やその関係者の話をして皆で泣いた。とりわけて友達のお姉さんが足だけを挟まれてどうしても助け出す事が出来なかった話には皆で泣いた。足が挟まって抜けない姉を置いて逃げて行けば、すぐ火の手が迫っていたので姉を見殺しにすることだと解っていたが、その時、姉は妹にこう言ったそうだ。「逃げて！逃げて！とにかく逃げて！火が回ってくるから逃げて！」と言っただけで、顔を伏せてあげなかったそうだ。何とかして助けようとしてもどうも助けられない同級生が諦めないのを見て顔を伏せて「逃げて」だけを姉が叫んでいた話を聞いて皆が泣いた。これは14歳の幼い私の僅かな記憶だ。今思っても怖いし、娘と一緒に原爆ドームを巡る観光バスに乗った日は原爆の日の夢ばかりを見て眠れなかったくらいだ。東連兵場では被ばくした人達を襲を引いて焼いて穴に埋めているのを見た。とにかくこの世のものとは思えない事ばかりだった。私は未だに平和記念式典や原爆ドーム近くに行けない。行くとき当時の記憶がよみがえり夢でうなされるからだ。原爆は絶対に落としてはいけない。つくってもいけない。後々まで人間の体に残るからだ。戦争をしたから原爆投下があったのだ。戦争も絶対にしてはならない。若い人は戦争の怖さを知らないのでも平和の尊さが解りにくいのだと思う。被爆者も高齢化し次々知り合いも亡くなり戦争や被ばくの体験者が少なくなってきた。戦争はいけない！と言っても戦争にリアルな感情がない世代が増えてきたので、その非人道性も実感されないようだ。私は心の底から戦争反対！原爆をつくっても使っても売り買いしてもならないと思っただけ。戦争には正義などない。相手を殺すのを罪とされないのだから何でもありだ。戦争も理由も正義もないがその理由付けをつけては戦争をする。オバマ大統領はノーベル平和賞受賞者なのでぜひ広島長崎に来て平和の誓いをしてほしいと思う。ローマ法王は広島に来て平和メッセージを残しているし、オリバーストーン監督も昨年広島に来た。平和は人が人として生きていく最低限度の条件だ。平和は人間の生きる条件であり権利である。(福田操)

私の被爆体験記録

原爆投下から来年は早いもので70年となります。原爆を受けた当時の私は5歳でした、その当時の事はほとんど忘れてしまいました。後世に残しておきたいそんな気持ちで取り組みました。被爆当時の私の家は、広島市宝町 番地 父 39歳、母 35歳、兄 8歳、(学校から疎開していた) 私 3郎5歳、弟 3歳、妹 1歳、の6人家族でした。

原爆投下の日昭和20年8月6日、朝 父はいつものように会社へ行った。私と弟は母に連れられ、母の実家 あまり遠くではなかった様に思うが場所はわからない。そこで私と弟は家の中で遊んでいた。突然ピカッ家の中でもものすごく光った、ドガン家は瞬間倒れた、「三郎」とわたくしを呼ぶ母の声がした。爆風で家が倒れた時母は鳴居の下敷きになって私を呼ぶのが精一杯だったと思う、今でもその声は私の耳の奥に残っている。私と弟は倒れた家の隙間をなんとかぐりぐり外に出た。見ると今まで立っていた家も全部倒電線も切れ垂れ下がって、屋外にいた人たちは着ている着物はあつちの熱線で焼け垂れ下がった着物、顔は火傷をして顔の形は分からないよう人たちが助けに来てくれ、助けてくれ」と助けを求めて数十人の人たちが走り回っていた。余りにも熱いので川に飛び込み亡くなられた人も大勢いると話を聞きました。

気がつくとそこには私と弟、母の実家の伯母さん従弟、そこには母の姿はなかった。「こうして居たんではいけない、とにかく逃げよう」と伯母の指示で避難場所を求めて歩いた、家から出るのがやつとで何もはかすにはだしのまま歩いていた。足が熱かった、あの熱線で焼かれた道路、なにも履かずに歩く。弟は足が熱いと言って泣き出す、泣く弟の手を引いて逃げた。着いた所は比治山の学校でした。

8月7日広島街は火が消え家など立っているものは何もなかった。伯母私を連れて昨日の家であった所に連れて行かれた。そこにはまだブスブスと煙が出ていた。そこで叔母はいろいろ探していたが私に「これがあなたのお母さんの頭の骨だ」と言われた、その頭の骨は私が思っていた骨より小さかった。私は「お母さんの頭ならもっと大きい」と言ったがお母さんが妹をおぶっていた妹の頭の大きさをわかないと思つた。そんな事を思いながら母と妹の骨を拾った。

それから2,3日だと思つたが身元の分からない遺体は何体か並べてあるところに連れていかれ、「あなたたちのお父さん、お母さん、近所の知っている人ではないか」と何カ所か連れて行かれた。その遺体を一人一人見ても父も知っている人はいなかった。

避難場所であった比治山の学校が孤児収容所になっていた食べるものは十分ではない収容所の中で年の多い子が、田んぼに行つて赤ガエル捕まえてこいと言って赤ガエルを捕まえに行つた、その赤ガエルを焼いて食わしてくれた。そんな毎日だったが、友達が一人また一人居なくなつていった。それぞれの身寄りの人が引き取りに来ていた。私はいつまで待っても来てくれない。

被爆から3カ月たった時、父の兄の妻 伯母さんが来た。その姿を見た私は飛びついたらなんて早く来てくれなかったん、と泣いたうれしかった。

(その伯母さんは顔に大きなケロイドがあった今考えると被爆の傷が治るまでどうにもならなかった。)と思つた。その伯母さんが今の へ連れてきてくれた。